

## ま え が き

本書は、アジア経済研究所海外研究員として行った2度の在外研究（1992～1994年：キャンベラ，2003～2005年：キャンベラ，バンコク）を主な下敷きに、平成19年度に実施した個人研究の成果である。

中学生の頃にはすでにオーストラリアに関心を持ち始めていたと記憶している。その後もアジアの東南端に位置する「異質」な国とアジアとの関係への興味は高まり、大学の卒業論文とその後の修士論文はオーストラリア・アジア関係にかかわるテーマで書いた。アジア通貨危機後に東アジア諸国は地域主義的傾向を強め、ASEANを核とした経済統合が進んでいる。近年では東アジア共同体の形成が議論されることも珍しくはなくなった。東アジアへの帰属が微妙なオーストラリアが、この統合プロセス、共同体形成プロセスにどのように関与していくのか、今後も興味は尽きない。

本書がこのようなかたちで出版できるのは、多くの方々からいただいた助言、支援、励ましのお陰である。

まずオーストラリア国立大学（ANU）の先生方に心よりの感謝を申し上げたい。本書のもととなった博士論文の指導教官を引き受けてくださったピーター・ドライスデール名誉教授、スチュアート・ハリス名誉教授、アンドリュー・マッキンタイア教授から受けた学恩は計り知れない。ドライスデール教授は、思うように執筆の進まない私にいつも独特のユーモアをもって接し、励ましてくれた。ハリス教授とマッキンタイア教授も、論点が拡散しがちな私を戒めながら草稿に多くのコメントをくださった。先生方からいただいたコメントのほとんどは批判的な内容だったが、それは博士論文そして本書全体の議論をより明確にするのに役立った。故ハインツ・アーン名誉教授には論文執筆の初期にお世話になった。執筆に時間がかかり、教授から

のコメントをいただけなかったのがとても残念である。改めてご冥福をお祈りしたい。またキャンベラ滞在中には ANU 豪日研究センターのスタッフにもお世話になった。特にセンター業務の責任者だったマギー・アッカー、マリリン・ポップ両氏は、多忙な指導教官やインタビュー相手との面談調整や、時に煩雑な滞在中の事務手続きなどで全面的にサポートしてくれた。記してお礼申し上げたい。

ANU で多くの学友に恵まれたことも私にとって幸運だった。なかでもジョン・カンケル、トニー・ウォーレン、クリストファー・ボカリエ、ルーク・ガウワー、ゴードン・デブラウワー、ソン・リガン、寺田貴、落合亮の各氏の名前をあげたい。比較的世代に近い彼らとの自由な議論からは刺激を受けることが多かった。また、ANU の出身ではないが、マイケル・ウェズリー氏との議論と彼の研究業績には強く啓発された。それは本書にも反映されている。

バンコクでは、タマサート大学政治学部長のナカリン・メークトライラット准教授が私を同学部客員研究員として受け入れてくださった。また、シリポーン・ワチャワンク准教授は快くカウンターパートになってくださった。ご二人からは公私にわたってさまざまな配慮をいただき、お陰で1年間のバンコク生活は快適かつ有意義なものとなった。心より感謝を申し上げる。タマサート大学政治学部の若手研究者たちとは、チャオプラヤー川ほとりのタイ料理屋で、ナカリン准教授を交えながら折に触れ話をする機会があった。彼らの世代の東アジア観、オーストラリア観、そして日本観を直接知ることができ、とても興味深かった。

調査に協力してくださった方々にもお礼を申し上げたい。本書の第5章以降の重要な部分はキャンベラ、バンコク、ジャカルタで行ったインタビューによるところが大きい。本来なら、貴重な時間を割いて聴き取りに応じていただいた方々のお名前をあげて謝意を申し述べるべきところであろう。しかし政府関係、経済・産業団体のほとんどの方が匿名を希望されたことから、あえてそれは行わない。本書の上梓にあたり、ご協力いただいたすべての

方々に深く感謝したい。

日本でも多くの方々に支えられてきた。澤田昭夫先生、故澤田マルガレーテ先生は、卒業論文と修士論文の指導を通して論文の書き方の「いろは」を手ほどきしてくださった。両先生から受けたご指導は、その後私が研究者として歩むことができた基礎となっている。オーストラリア学会には第6章のもととなった構想を2003年の全国研究大会で報告する機会を与えられ、会員諸氏から貴重なコメントをいただいた。また、大矢根聡教授（同志社大学）と福嶋輝彦教授（桜美林大学）には、年度末のお忙しい時期に無理をいって草稿すべてに目を通していただき、それぞれのご専門の立場から詳細な助言をいただいた。さらに出版に先立つ審査では研究所内外の匿名の査読者4名からのコメントもいただいている。いただいたコメント、助言のすべては原稿の改善に役立った。深く感謝する次第である。

最後に、私事ながら家族への感謝を述べることを許していただきたい。2度目の在外研究には単身で赴任したため、妻・郁子と息子・悠希には大きな負担をかけてしまった。にもかかわらず2人は常に理解を示し、励ましてくれた。3人兄弟を育て上げた母・優子は、私が日本不在の間、妻と息子の様子をいつも気遣ってくれた。このような家族からの支えと励ましがなければ本書の完成はありえなかった。心から感謝したい。

本書の出版準備も最終段階に入った2008年10月、父・稔が急逝した。教育者としての人生を全うした父は、生前、私の研究の進捗を気にかけてくれた。その生きざまをもって私に人生の指針を与えてくれた父に、本書を捧げたい。

2008年10月 幕張にて

岡本 次郎